

いえじがわ 家地川



先

月号の秋丸の西端、大正・北ノ川との境のトンネルの手前（東）を左折（南へ）するとすぐに橋がある。橋のもとには「野地分岐」と書かれたバス停。橋を渡り、道なりに行く。野地地区の長い直線が終わったところ辺りから家地川である。向こう岸にも数件の家屋が見える。現在、28世帯59人が暮らしている。

古くは、川口（現南川口）、寺野、松生原、野地、秋丸と並ぶ「井細川六ヶ村」の一つであったが、さらに歴史をさかのぼると野地村の枝村であったことがわかる。

野地村に比べると、山間であるため平坦な耕作地が少なかった家地川。江戸期に入ると、年貢米の管理が厳しくなったこともあり、精力的にほ場開発が行われた。それに伴い人口も増え、戦国期には10戸ほどであった戸数が、徳川吉宗の頃になると30戸近くにまで増えている。

堰堤周辺、家地川駅周辺、黒潮町荷稻へ抜ける集落が家地川地区であると認識されがちであるが、荷稻に抜ける集落の手前を南に入ったところに大きな集落がある。羽立川（はたちがわ）というその集落は、谷間に沿って深く長い。山とほ場の境目には、延々と害獣対策のトタンが設置されている。これだけの距離を手作業で並べるのは、さぞ気の遠くなる思いであったろう。農地管理においては、この羽立川だけでなく、いたるところ



丁寧な仕事ぶりの河内神社の欄間。
平成16年の台風でも被害を受けた。

ろに地区民の熱意と苦勞が垣間見える。江戸期に村人あげて励んだほ場開発のDNAが受け継がれているというほかない。

さて、家地川地区の産土神は天津彦根神を祀る河内神社である。この河内神社は、その歴史の中で何度も台風などの被害を受け、その都度修復や改築を行ってきた。明治44年の本殿大修復の記録が詳しく残っている。屋根は、当時の主流であった瓦葺きではなく、薄く削いだ杉板で葺く「扮（そぎ葺き）削ぎ葺きとも書く」で、近隣にその職人がいないため、遠方から職人を集めた。職人たちの賃金は日当90銭であったという。そして迎えた落成式。もち投げに使った米はなんと四斗俵が15個。大宴会が催され「大いに飲酒いたし、大酔いに御座候」ということであったと棟札に記載されている。当時の村人たちの喜びぶりが目に浮かぶようである。

町のうごき

(8月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,030	-21	男 0	20	10	11
女	8,888	-20	女 7	18	14	23
計	16,918	-41	計 7	38	24	34
世帯数	8,452	-17	(8月中の届出)			

窪川地域 11,963人 大正地域 2,385人 十和地域 2,570人

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	9月2日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.75
化学的酸素要求量	≤ 10.0	3.343

調査：大正（吾川）

資料：四万十高校自然環境部